

特集「樽前 arty + が観た Still Living

～千葉和魂編～

美術家・藤沢レオの個展「Still Living」が苫小牧市立美術博物館で開かれています。藤沢にとって過去最大規模の個展であり、作家として実像を伝える貴重な展示です。藤沢が中心となり、美術展や教育現場でのワークショップを手掛けてきたNPO法人樽前 arty + のメンバーが、個展を鑑賞し、それぞれの思いを随時、綴っていきます。第5回は樽前 arty + 副代表理事の千葉和魂。

個展は12月2日終了しましたが、中庭展示スペースの《柱の研究》と企画展示室外壁の《場の彫刻（大柱）》は3月3日まで引き続き展示されます。

本個展の展示作品のいくつかは活動を共にする数年の間に観てきた作品であったが、一同に介した作品の間を巡ると、一貫した命題を強く読み取ることができたと同時に、その当時の様々な感動や思考と私の小さな思い出が寄り添っていることを感じた。

そんな中、中庭に展示された《柱の研究》は初めて出会った作品だった。当初は屋根がない状況での展示で棒と風に揺らぐ布と影の前に立つと、不思議な浮遊感が心地よい作品だった。だが、会期中盤になり屋根設置が完了した後に、改めて《柱の研究》の前に立つとその鑑賞イメージは変化した。

薄闇の中に浮かび上がる棒の巨大な影が際立ち、見上げる自分との間にある棒の存在を忘れ不安な気持ちにさせられた。その感情を整理する前にもう一周してみようと外に出た。

巨大な異物が日常に溶け込む《場の彫刻（大柱）》からビビットな色使いの中に「行い」が重ねられた《場の彫刻》、《不在の森》を抜け、彫刻の意匠の楽しみを横目に、《柱の研究》の前に立つ。「ああ、締まった」思考よりも先に感情でそう思った。

それから何度か訪れてはその感情をひも解いては絡まる試みを楽しんだ。そして個展最終日に見納めのためと展示会場を一人ぐりと廻った。やはり《柱の研究》は最初からこうあるべきだった。布が揺らいでいるのもよかったんですけどねえ、という感想も聞こえてきたが、本個展を表現するためにはこの姿が必要だったのでないか。

そんな思いを抱えながら、遅れて美術博物館にやって来る友人との待ち合わせのためにできた時間を過ごした。その時、そういえば安部公房の小説に「棒」という作品があるな、と思い出した。

隣接する苫小牧中央図書館で全集の中から目的の小説を見つけた。手すりから落下する父が棒になり、その棒について博士と学生が議論し裁きを下すという短い小説「棒」を読んだ。「棒」の犯した罪、という言葉の引っかかりを持ったまま美術博物館に戻った。

そして《柱の研究》の前に立った。数分前とは違う私がかそこらにいた。

どこにでもある一本の棒が意味と意図を持たされ空に張り付けられ、罰せられているのに、その向こうの布に写る影の雄大に根付く力強さばかりに目を向けていることに気付いた。ふと陸前高田の一本松を訪れた際に私が感じた違和感や気味の悪さを思い出した

調べてみると安部公房は「なわ」「棒になった男」と棒に関する作品を残していることがわかり、直ぐ手配した。個展は12月2日で終了となるが、中庭展示スペースの《柱の研究》と企画展示室外壁の《場の彫刻（大柱）》は3月3日まで引き続き展示されるので、それらを深く味わう機会が私にはまだあるようだ。



